

言葉による伝え合いができるための援助の工夫

～友達と話し合って進めるグループ活動を通して～

沖縄市立高原幼稚園

教諭 宮城 小百合

I テーマ設定理由

核家族化や都市化などといった社会やライフスタイルの変化により、幼児を取り巻く環境は大きく変化している。生活習慣の確立が不十分、親や教師以外の地域の大人や異年齢の子どもたちとの交流の場や自然体験の減少などが生じている。さらに、人間性、心の育ちが低下し、コミュニケーション不足が問われている。

幼児教育は、子どもの基本的な生活習慣や態度を育て、規範意識、思考力、豊かな感性と表現力等の芽生えを養うなど、義務教育及びその後の教育の基礎を培う上で重要な役割を担っている。

幼稚園教育要領では、「幼児期における教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要な役割を担っている」と示されており、言語分野においても、言葉の獲得に関する領域『言葉』では「経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う」ことが明記されている。また、「内容の取り扱い（１）」において、「言葉は、身近な人に親しみをもって接し、自分の感情や意志などを伝え、それに相手が応答し、その言葉を聞くことを通して次第に獲得されていくものであることを考慮して、幼児が教師や他の幼児とかかわることにより心を動かすような体験をし、言葉を交わす喜びを味わえるようにすること」としている。幼稚園教育要領解説では、「幼児期の言葉の発達は、個人差が大きく、表現の仕方も自分本位なところがあったりする。しかし、教師や友達とのかかわりの中で、心を動かす体験を積み重ね、それを言葉を使って伝えたり、教師や友達からの言葉による働き掛けや様々な表現に触れたり、言葉でや

り取りしたりすることによって、次第に自分なりの言葉から人に伝わる言葉になっていき、場面に応じた言葉が使えるようになっていくのである。」と記されている。

本園の幼児の実態を見てみると、明るく活発で人懐っこく、積極的に話しかける子が多い。半面、友達との遊びやグループでの活動において、意欲的ではあるが自分の思いや考えを言葉で伝えるのが苦手な子も見られる。

これまでの保育を振り返ってみたとき、「聞く態度・話す態度の育成と援助のあり方」を園内研究のテーマとして、様々な人との交流や集会を通して感動体験を共有できる場を計画し取り組んできた。しかし、みんなで取り組む形態や話し方などを重視するあまり、自分の気持ちを表現する楽しさや、相手と気持ちを共有する経験が不十分であった。

そこで、友達と話し合って進めるグループ活動を通して、心を動かし伝えたいくなるような活動を工夫することで、言葉による伝え合いができるようになるであろうと考え、本テーマを設定した。

II 目指す幼児像

- 自分の思いや考えを伝え合うことのできる子
- 友達と進んでかかわり、楽しんで活動に取り組む子

III 研究目標

友達と話し合って進めるグループ活動を通して、言葉による伝え合いができるための援助の工夫

IV 研究仮説

基本仮説

言葉で伝える活動を工夫することにより、自分の思いや考えを伝え合うことができるであろう。

V 研究構想図

次ページ参照

VI 研究内容

1 理論研究

【具体仮説1】

領域「言葉」の意義や幼稚園におけるグループ活動の意義について理論研究をすることにより、教師の援助のあり方が明確になるであろう。

(1) 幼稚園教育要領「言葉」の捉え

① 改訂の背景としての「言語力」の育成について

領域「言葉」の改訂は、他四領域の改訂のように従来の幼稚園教育要領の内容の改善・充実という側面とは異なる改訂の背景をもつ。言語力育成協力者会議(2007)の報告を受けて「言語力の育成・活用の重視」という点から、一貫した教育課程をめざし幼稚園教育要領でも言語力が育成されるように改訂が行われた点が、領域「言葉」の改訂の特徴と言える。

言語力育成協力者会議の報告では、言語力を「知識と経験、論理的思考、感性・情緒等を基盤として、自らの考えを深め、他者とのコミュニケーションを行うために言語を運用するのに必要な能力を意味するものとする」と定義している。つまり、言葉の働きとして、二つの側面、他者とのコミュニケーションという働きとともに、コミュニケーションを通して自分の働きを深める働き、思考や論理、感性や情緒を育てるという働きが想定されている。そこで、言語力を育成するためのポイントとして以下の4点が示されている。

ア 言語の果たす役割に応じた指導の充実（言

語は知的活動、感性や情緒、コミュニケーションの基盤であるので、各々に応じた指導を充実するとともに、個々の子どもの発達の実態や経験の違いに応じた配慮を行う）

イ 発達の段階に応じた指導の充実（各発達段階に応じて、内容や方法のあり方を検討するとともに、個々の子どもの発達の実態や経験の違いに応じた配慮を行う）

ウ 教科を縦断した指導の充実（全ての教科等での言語の運用を通じて言語力を育てていく）

エ 多様な教育環境を活用した指導の充実（室内だけではなく、図書館や文教施設、体験活動の場など多様な教育環境を活用する）

つまり、言葉はすべての学びの要であり、幼児期からコミュニケーションと思考を深めるといふ二つの働きがあることを意識すること、そして幼児期にふさわしい教育方法として、総合的で主体的な活動である遊びを中心として育てていくこと、しかもそれは教科「国語」の学習に領域「言葉」がつながるといふような一対一対応の関係ではないという理解が、今回の改訂の背景になる考え方である。

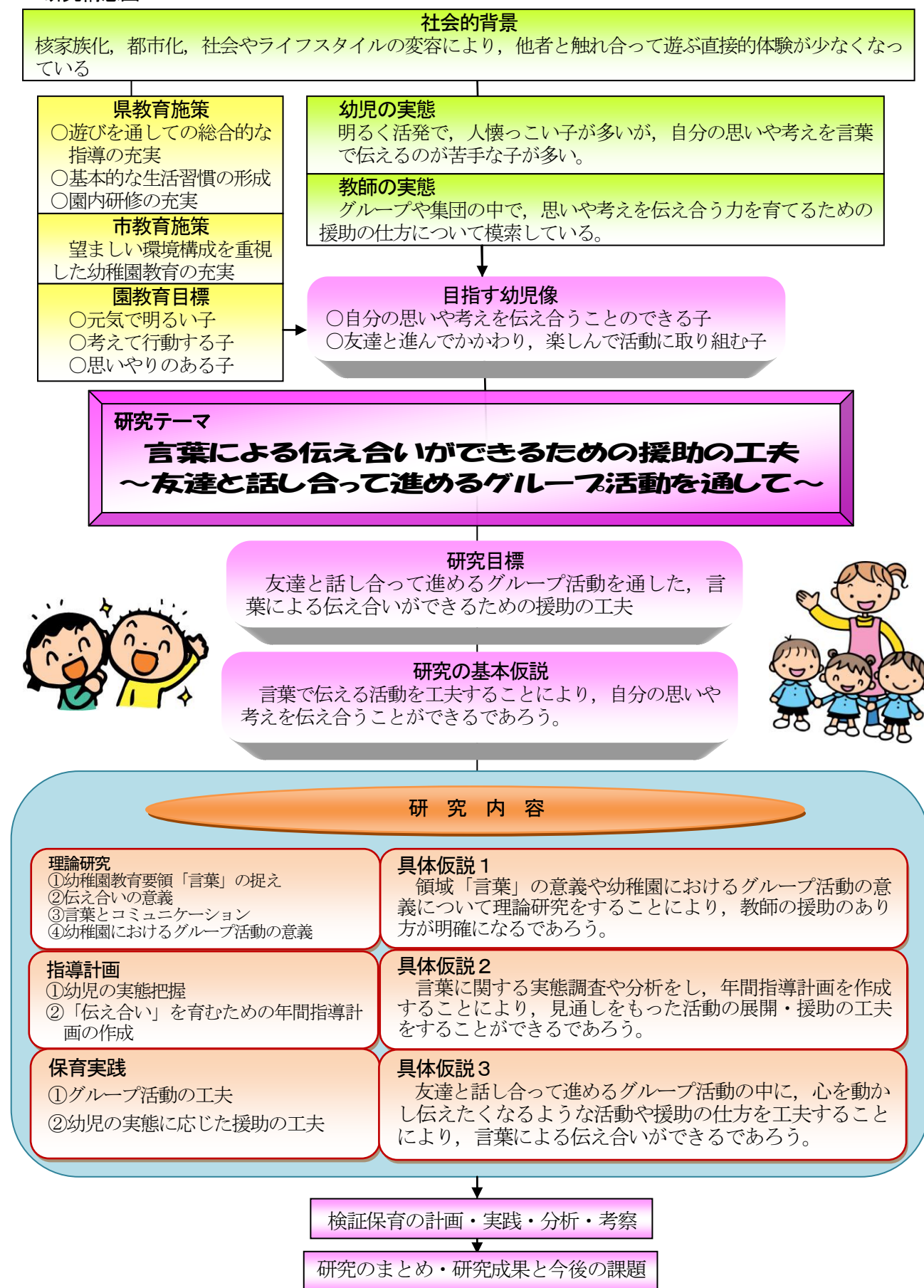
② 幼稚園教育要領文言の改訂について

無藤隆、柴崎正行らによる「新幼稚園教育要領・新保育所保育指針のすべて」において、「幼稚園教育要領の領域『言葉』では、第一に話すことに加えて、聞くことの重視が書き加えられ、『伝え合う』ことがより明確になった。また、第二には、幼児なりの思考、『思考力の芽生え』を培う観点が加えられたことの二点が幼稚園教育要領文言の改訂である。」

幼稚園教育要領の内容(2)で、「したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりなどしたことを自分なりに言葉で表現する」の中で、「自分なりに表現する」とは、幼児期の特性として、大人と同じような言葉や表現が幼児期からできるようになることを求めるのではなく、その子なりの様々な表現、身体表現も混ざりながらの表出が、次第に言葉で表現することができるようになることが大事である。

③ 平成21年度から完全実施となった幼稚園教育要領の「言葉」について

V 研究構想図



幼稚園教育要領「言葉」の内容の取扱い
(2)で、「幼児が自分の思いを言葉で伝えるとともに、教師や他の幼児などの話を興味をもって注意して聞くことを通して次第に話を理解できるようになっていき、言葉による伝え合いができるようにすること。」が新たに加えられた。このことから、相手の話をじっくりと聞き取り理解することは、コミュニケーションをとるうえで重要であると言える。

④ 小学校入学前までに配慮すべきことについて

小田豊、神長美津子らによる「幼稚園教育要領の解説」では、「今回の幼稚園教育要領の改訂において、領域『言葉』では、教師や他の幼児の話に興味をもち注意して聞くことを重視している。自分なりに言葉で表現することと人の話を注意して聞くことの両方が育つことによって、幼児は言葉による伝え合いができるようになる。言葉による伝え合いは、集団による一斉授業を柱とする小学校生活の基盤となるものでもある。」と示されており、小学校入学を前に配慮すべきことが述べられている。その内容を以下にまとめた。

① 日常生活における伝え合いの場面や活動の工夫

- ・言葉による伝え合いに必要な意欲や態度を身に付けさせる。
- ・伝え合いの場面は、教師の指示を幼児に浸透させるためにあるのではなく、幼児が園生活の中で感じた驚きや喜び、疑問などを他者と共有し、ともに生活することの楽しさを感じさせる。

幼児の育ちに応じた指導の工夫

- ・一対一で話す場面と大勢（みんな）で話す場面の違いに気付かせる。
- ・相手の話を注意して聞くことや、相手に分かるように話すことなどの態度を身に付けさせる。

② 葛藤体験の場면을幼児の伝え合いに生かす。

- ・泣いたり怒鳴ったりせずに気持ちを落ち着かせる。
- ・叩いたり蹴ったりするのではなく言葉で自分の気持ちを伝えさせる。
- ・相手の気持ちを想像し相手の言い分も聞かせる。

③ 伝え合うことが楽しくなるような環境や教材の工夫

- ・クラスで集まる場面で、幼児の側から出てきた話題や活動を取り上げていく。
- ・互いの顔が見えるように座らせる。
- ・話し合いの場面を多くもつ。
- ・みんなの前で話す機会をもつ。（当番活動など）

(2) 伝え合いの意義

① 伝え合いとは

幼稚園教育要領解説では、「幼児は、幼稚園生活の中で心動かす体験を通して、様々な思いをもつ。この思いが高まると、幼児は、その気持ちを思わず口に出したり、親しい相手に気持ちを伝え共有しようとしたりする。このような体験を通じて、自分の気持ちを表現する楽しさを味わう」ことが大切である。また、「幼児は、自分の話を聞いてもらうことにより、自分も人の話もよく聞こうとする気持ちになる。人の話を聞き、自分の経験したことや考えたことを話す中で、相互に伝え合う喜びを味わうようになる」と記されていることから「伝え合い」を以下のように捉えた。

② 心動かす体験とは

幼児の生活の中での心動かす体験について以下のように記されている。

- ・自然の美しさや不思議さに触れたとき
- ・楽しい活動に参加したとき
- ・面白い物語を聞いたとき
- ・友達ともめたり、失敗したとき
- ・遊びの中で新たなことを思いついたり、何かに気付いたり、疑問を感じたりしたとき

③ 聞く力の育成と伝え合い

無藤隆・柴崎正行らによる「新幼稚園教育要領・新保育所保育指針のすべて」の中で、『幼児が教師や他の幼児とかかわることで言葉による伝え合いが生まれる、伝え合いという両者の関係性ができるためには、相手の話を聞いてみたい、わかりたいという思いが重要である』と示すとともに、そのための配慮すべき点が以下の3つに表されている。

ア 聞いてみたいと思える関係を保育者と子ども同士の間に育てていくこと

クラスのなかで仲間と伝え合い聞き合うことは楽しいという感覚を日頃から様々な場面で育てておくこと。伝え合うとは一方向ではなく、双方向、さらに言えば一体的な感覚と言える。皆で集まる時に、いつも何となくざわざわして、保育者から「静かにしなさい」と注意される関係のなかであれば、皆で集まって話を聞く時はこんなことでよいのだと子どもたちは思ってしまう。それに対して耳をすますいろいろな音が聞こえてくることを経験したり、皆で聞き合う場面の前の一瞬の沈黙や先生の示すものやことがわくわく感を高めるものであれば、聞くことは楽しい場として認識されるようになる。そうした伝え合ってみようという思いや関係を、日常の様々な場面を利用してつくり出すことが大切である。お行儀よく聞くしつけというよりも、受けとめ合い、時に笑い合うような伝え合いがきっと面白いことが聞けるはずというように、子どもの聞くことへの期待を育て聞く力を育てていくことが大事である。

イ 聞いてみたいという話の内容が語られること

幼児は最初から面白い話を話としてまとまってもっているのではなく、聞いてくれる相手との関係のなかで言葉がひき出され、時には手助けされ面白い話になっていく。先生においても同様である。無駄な言葉や注意の言葉が長く続けば聞きたい話ではなくなってしまふ。先生が楽しい話や計画をたくさんもっていてそれを自分たちに宛てて語ってくれているという感覚をもてることが大事なのである。そしてお話の世界にいざなうことで、子どもはまとまった話を聞くことの楽しさも身につけていく。

ウ 聞く場の環境構成の工夫

話がいくら面白くても、外で騒がしい音が聞こえたり、他のクラスの子どもが外で楽しそうに遊んでいるのが見えれば、じっくり聞くことはできず気が散ってしまう。どのような時間にどのような向きで聞き合うことができる場の環境を構成するのかが大事である。親しい友達と一対一、何人かの仲間、クラスでといういろいろな場がある。クラス全体で集まる時には子どもの

まなざしが共同で一つのことで集中できるような場をつくることも特に大事である。また、朝か帰りなど決まった時間に期待感をもって集まるのが毎日できるということも聞く場の構成となる。

以上のことから、教師と子ども、子ども同士の間に聞いてみたいと思う関係性を築き、話の内容や聞く場の環境の工夫をしていくことが伝え合いには必要であると考えます。

④ 領域「言葉」の内容と他領域の関係

幼稚園教育要領の五領域は、すべてが密接にかかわり合っている。そこで、「言葉」の領域と他の領域との関係を以下にまとめてみた。

ア 領域「健康」とのかかわり

領域「健康」は、幼児の心身の健康を維持し、明るく伸び伸びと自分の体を思いきり動かすことを目指している。子どもは様々な活動を通して自然や人と触れ合うことによって、驚きや発見、共感の感情を呼び起こす。これらは、子どもの言葉を生み出す重要なきっかけとなる。

イ 領域「人間関係」とのかかわり

領域「人間関係」は、身近な人との積極的なかかわりを通じて、自分の思いや相手の思いに気付くことを目指している。友達や保育者とのかかわりの中で築かれた温かな人間関係は、子どもが自らの居場所を感じることができ、言葉を通じた日々のあいさつや話し合いは、お互いを認め合う大切な役割を果たす。

ウ 領域「環境」とのかかわり

領域「環境」は、幼児が自らを取り巻く環境と積極的にのかかわり、好奇心や探究心に基づいて様々な気付きを生むことを目指している。自然や生活の中で体験した様々なことがらを通して、幼児の中に生じた発見や疑問を「問い」というかたちで引き出すことにより、幼児の好奇心や探究心を導くことになり領域「言葉」の内容と深くかかわってくる。

エ 領域「表現」とのかかわり

領域「表現」は、幼児が様々な対象とかかわり、そこから生じた豊かな感性を自分なりに表現して楽しむことを目指している。幼児の豊かな感性を十分に発揮させるためには、心を動かされるような対象と存分に触れ合い、そこから得たイメージを自由に言葉や体を使って表現できる機会や場を保障することが大切である。

(3) 言葉とコミュニケーション

幼稚園生活での言葉の活動について挙げてみた。

- ・親しみをもって友達や教師へのあいさつ
- ・友達との様々な遊びの中での伝え合い
- ・朝や帰りの会での、教師や友達の話を書く、発表するなどの活動
- ・集会などで皆で話を聞き、疑問に思ったことへの質疑応答など、子どもは日常の園生活の中で言葉を介してのコミュニケーションをとっている。

① 子どもの言葉と人間関係

「幼稚園教育要領の解説」（小田豊/神長美津子）によると、幼児期は言語的な発達がめざましい時期であるが、幼児期の言葉の発達としてまず重視すべきことは、単に語彙数が爆発的に増える点や、文法的に正しく話せるようになるという点ではなく、言葉によって経験や感情などを自分なりに表現するという点にある。

言語発達の途上にある幼児の発する言葉は、幼児期ならではの発想や表現による妙味があり、思わず微笑んでしまう素朴さや懸命さに満ちている。このような子どもの言葉は、家族や教師、友達など、身近にいる親しい人々に向けられることがほとんどである。したがって、子どもの言葉の土台には子どもを取り巻く人間関係がある。それは子どもが言葉を発する前からの表情や身振りなどによるコミュニケーションの積み重ねによって築き上げられるものである。

② 保育の中での言葉を支える関係性

秋田喜代美（幼稚園じほう）は「聴く、語る、伝え合う」を以下のように捉えている。

ア 聴くとは

保育の中のコミュニケーションの出発点は、自分を受け入れ聴いてくれる他者の存在を子どもが感じ、その人と同じ場にいられる安心感、安定感のある関係性の形成である。「聴く」は傾聴などの熟語もあるように、音が耳に入る行為だけでなく、聴き取るという聴き手側の意図性がより強い。幼稚園で培っていきたいことは

- ・相手の意図を汲み取る聴き方
- ・他者の言葉と自分の思いや経験をつないで考

える聴き方

教師も、子どもが発した言葉の内容だけでなくその言葉が発せられるまでの経緯やその場の他児との関係から生じる、存在としての子どもの内奥の声や思いを聴きとろうとして言葉を受け止めている。この両者の関係が大事である。

イ 語るとは

これを誰かに語りたいと子どもが思える内容こそ、保育で育てることである。伝聞情報をあれこれ話すことの話し方を指導することよりも、身体をくぐって経験したことや創意工夫から生まれたての言葉、その子のまとまった思いを言葉にしていくことを育てることが、幼児期には大事である。

子どもはある事物に没頭しているときには言葉は発しないことが多い。沈黙の中で真剣に事物と対話している。没頭の中で何かとの出会いから自分なりに見つけたり、自分の目的に照らしてうまくいったときには、語りたくなるのである。自分の経験からつむぎ出したばかりの言葉を子どもは語りたい人に向けて語る。遊び込む経験から子どもが自分で得たことを語る言葉になるのである。

ウ 伝え合うとは

伝え合うは、今回の幼稚園教育要領でも大事にされている点である。互惠性の関係の深まりが、コミュニケーションの質を変える。

「あのね」など、相手の関心を自分に向け、自分の主張を宣言し、相手に念を押し、自分の目的のために人を誘ったりするときに自然に言葉の中に「ね」という助詞がでてくる。

- ・「・・・しようねえ」は、関係のきずなをつくるよう提案したり意図を確かめたりする。
- ・「あのね、それでね」は、相手に向けて自分の気持ちをつないでいく。
- ・「ぼくたちのだよねえ」は、二者の連帯感の形成を生み出し、そして三者以上の関係性の会話へと変わっていく。

その関係性が言葉に表れ、伝えるから伝え合う関係になる。使う言葉によって関係性も形成されていく。以上のことから、伝え合うこと

は、仲間との関係性の中で育てていくことが求められている。

(4) 幼稚園におけるグループ活動の意義

保育用語辞典によると、「グループ保育」とは、子ども同士のグループ単位で保育を行うこと。子どもの仲間同士で、それぞれの考えや感じたことを伝え合うことを通して、協力し合うこと、お互いを認め合う中で自主的に行動することなど、保育者が直接的に教えるのではなく、子どもの集団の中で身に付けていくことを目的とする。

グループという単位を考えると、気の合う友達同士が遊ぶという自然発生的なグループと、当番や係などのためのグループ、生活グループのように保育者がある意図をもって構成するグループがある。これらのことから、園生活で行うグループ活動は、人間関係を育むうえで大切である。

2 指導計画

【具体仮説2】

言葉に関する実態調査や分析をし、年間指導計画を作成することにより、見通しをもった活動の展開・援助の工夫をすることができるであろう。

(1) 幼児の実態把握

① 実態調査アンケート

ア 調査目的

幼児の家庭でのコミュニケーションの様子や言葉による伝え合いの実態を把握し、本研究の資料として役立てる。

イ 調査方法

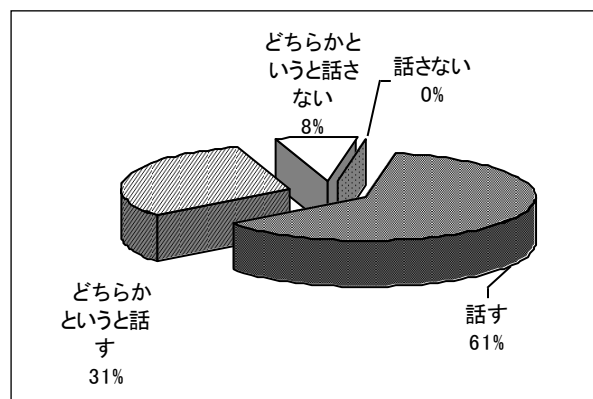
(ア) 調査対象：高原幼稚園 3 組 33 名の保護者

(イ) 調査日：平成 21 年 11 月 10 日

(ウ) 回収率：79%

ウ 調査結果と考察

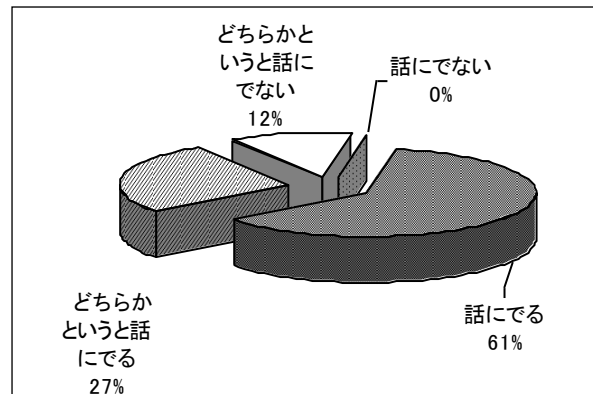
質問 1 お子さんは、幼稚園での出来事を話しますか？



質問 1 について、お子さんが話してくれたエピソードで、印象に残っていることをお聞かせ下さい。（自由表記及び複数回答）

記入してもらえた主な内容	人数
○幼稚園での出来事や遊びについての話	9 人
○友達についての話	6 人
○チャレンジしたことについての話（運動遊びなど）	6 人
○無記入	5 人

質問 2 お子さんは、幼稚園での友達の名前が話によく使えますか？



質問 3 質問 2 の友達の名前が出てきた話題は、どんな内容が多いですか？（複数回答）

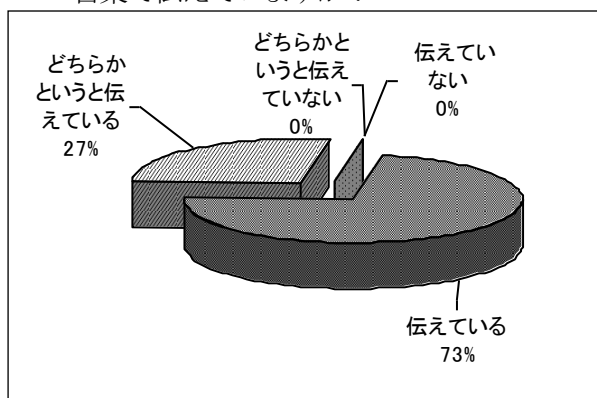
回答項目	人数
① 楽しかったことや嬉しかったこと	20 人
② けんかしたことや困ったこと	6 人
③ その他	1 人
④ 無記入	4 人

【質問 1・2・3 の考察】

幼稚園での様々な出来事や遊びの中で、友達とのかかわりも広がり、家庭でも友達の名

前を出して話をするなど、幼稚園での様子を具体的に言葉で伝えていることがうかがえる。また、チャレンジしたことについての話では、運動遊びなどを通して今までできなかったことができるようになった喜びを家庭でも話していることから、幼稚園において心動かす体験を重ねていくことは、自分の気持ちを言葉で伝えたいという気持ちを育むことにつながるものと考ええる。

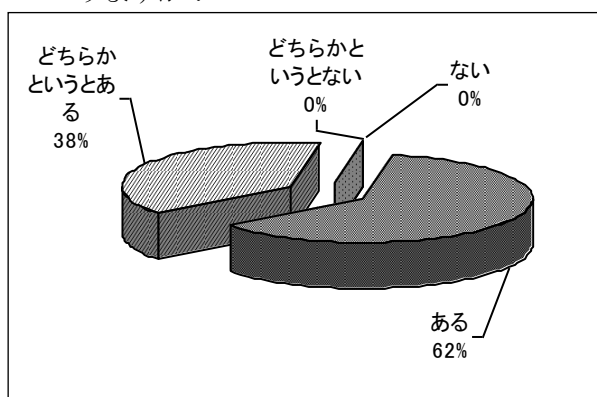
質問4 お子さんは行事や準備するものについてなどの教師からのお知らせを、自分の言葉で伝えていますか？



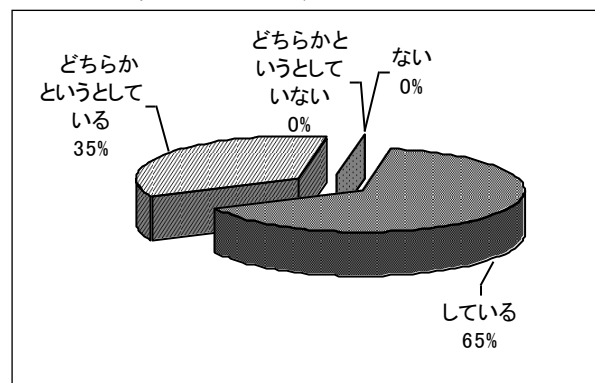
[質問4の考察]

教師からのお知らせを、自分の言葉で伝えている子が100%と、学級において手紙等の配布時に、内容も具体的に伝え自分の言葉でも伝えていくよう声かけしたことが、結果として表れたように思える。そのことが、家庭での子どもと保護者との会話、すなわち「伝え合い」が生まれるきっかけとなった。

質問5 普段の生活の中でお子さんの話を聞いたり、一緒に話し合ったりする時間はありますか？



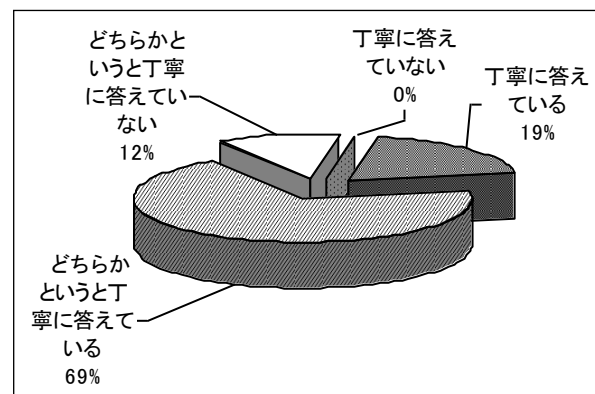
質問6 日頃から意識してお子さんと会話をするようにしていますか？



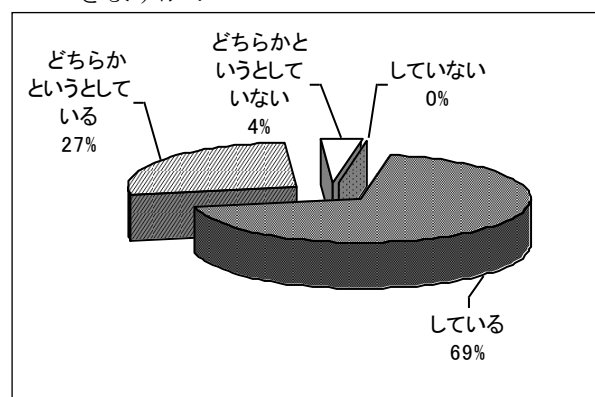
[質問5・6の考察]

家庭での親子の話し合いの状況を見てみると、ほとんどの家庭が話し合う時間があり、また、意識して親子での会話を大切にしていることがうかがえる。

質問7 お子さんのお話や質問にどのように答えていますか？



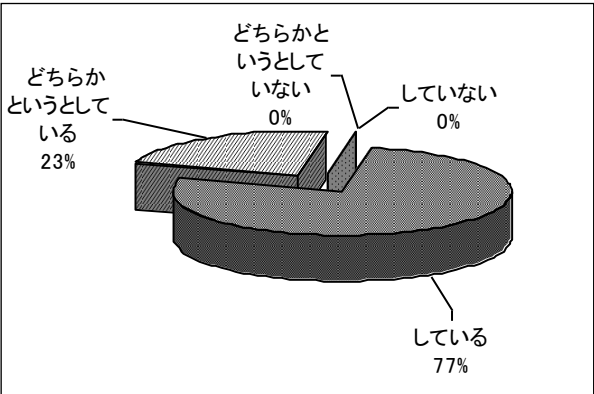
質問8 お子さんは、お父さんやお母さんに自分の思ったことを言葉で伝えることができますか？



[質問7・8の考察]

質問8で保護者に96%の子が思ったことを言葉で伝えているのに対し、質問7では子どもの質問に丁寧に答えているが19%と極端に少なく、また、どちらかという丁寧に答えていないも12%と目立ち、話は聞いてあげているが丁寧に答えていない傾向が見られる。

質問9 褒めたり、励ましたりするようにしていますか？



[質問9の考察]

保護者は、子どもを褒めたり励ましたりしているが大半であり、子どもの成長や行いに関心が高く、肯定的である保護者が多いことがうかがえる。

[全体の考察]

- 幼稚園生活の中での心動かす体験を工夫する
- 友達（仲間）との関係の中で伝え合いを育てる

今回の保護者へのアンケートでは、未提出が7名おり学級の5分の1の実態が捉えられていないことになるが、幼稚園生活での行動観察の中から、概ね推測できることをもとに考察として表していった。

アンケート結果から、幼稚園生活においては、幼児が言葉で伝えたいような経験を重ね、友達とのかかわりの中で自分の話を聞いてもらったり、人の話も聞くことで、自分の経験したことや考えたことを話したりするようにし、相互に言葉による伝え合いができる活動を意図的に取り入れていく必要があると考える。

② ソシオメトリックテスト

ソシオメトリックテストとは、子どもにクラスメートの写真や名前の書かれたリストを見せて、各クラスメートとどのくらい一緒に遊びたいかを評定してもらう「仲間評定法」と、好きなクラスメート「選択」と嫌いなクラスメート「排斥」を数名あげてもらう「仲間指名法」がある。子どもの仲間内地位を検討したり、クラスの中でグループなどを知ることができ、友達関係を広げる手立てともなるテストである。

本研究では、グループ活動を進めていく上でクラス内での友達関係を把握するため、クラスの中で好きな友達を3名あげてもらう「選択」だけを行った。幼児期は好きな友達との関係を基盤にかかわりが広がっていくことを考慮し、あえて「排斥」（嫌いなクラスメートをあげてもらう）は行わないこととした。表1はその結果である。

表1(11月11日テスト実施 ◎相互関係 ○選択関係)

(選ばれる側)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33
1	◎																																
2		◎																															
3			◎																														
4				◎																													
5					◎																												
6						◎																											
7							◎																										
8								◎																									
9									◎																								
10										◎																							
11											◎																						
12												◎																					
13													◎																				
14														◎																			
15															◎																		
16																◎																	
17																	◎																
18																		◎															
19																			◎														
20																				◎													
21																					◎												
22																						◎											
23																							◎										
24																								◎									
25																									◎								
26																										◎							
27																											◎						
28																												◎					
29																													◎				
30																														◎			
31																															◎		
32																																◎	
33																																	◎
◎	2	2	1	1	2	0	0	3	2	2	1	3	1	1	2	2	0	0	1	1	1	1	1	0	1	1	3	1	2	1	1	2	2
○	1	2	0	1	2	0	0	0	1	1	4	1	2	1	0	2	6	1	0	3	0	2	0	0	3	0	3	1	0	0	1	0	1

テストの結果より、誰からも選ばれなかった子(3名)や好きな友達を1～2名しか選ばなかった子(8名)がいることが分かったことから、

グループ編成する際に配慮したり、友達とのつながりがもてるように援助していく上での手立てとした。

(2) 「伝え合い」を育むための年間指導計画の作成

① 指導計画と幼児理解

指導計画は、ある時期の学級の生活全体を見通すものなので、その前の時期における実態を捉えることが必要になる。つまり、幼児の具体的な姿をどう捉えるかが出発点になる。どのようなことに興味・関心をもち、ものや人とどうかかわり、自分のもつどんな力を出しているのかなど、幼児の中に育ちつつあるものを捉える発達理解が必要である。理解の仕方が正しくないと、指導の方向性が変わってしまうからである。幼児の発達を理解するために必要な見方を以下の3点に表した。

① 興味・関心はどこにあるのか

表面的な姿だけを捉えるのではなく、幼児の言葉や動き、表情などから、興味・関心はどこにあるのかを捉えることが大切である。

② どのような思いで取り組んでいるか

単に遊んでいればよいわけではなく、どんな楽しみ方をしているか、意欲はどの程度か、友達との関係はどうかなど、幼児の心の揺れや動きを捉える必要がある。その子なりの楽しみ方を理解することで、活動への援助が変わってくるのである。

③ 自分の思いの実現に向かっているか

それぞれの思いをもって取り組んでいても、うまくいかないこともある。その時には、原因はどんなことか、幼児だけで乗り越えられそうかを捉える必要がある。そのことが、環境の構成や援助の方法につながっていく。

である。

② 指導計画のねらい・内容

指導計画を作成するには、今の生活する姿を捉えて、これからの生活がより充実したものになるための方向性を見通しておかねばならない。ある時期に育ってほしい心情・意欲・態度などがねらいであり、そのねらいに向かって経験してほしいことが内容である。つまり、内面的な心の方向性がねらいで、それを具体化して、考えたり、工夫したり、活動したりする経験を見通したものが内容である。内容を設定するときのポイントを以下の3点に表した。

① 幼児の発達の過程を見通す

入園から修了までの発達を見通し、今の時期はどのような経験が必要か長期的な目で見ると。さらに、この時期、この季節でなければできない経験なども考える。

② 変化を見取る

これまで興味をもっていたことがかわってきたか、遊びへの取り組み方はどうかなど、幼児の姿がどのように変化しているかを捉える。また、季節の変化や生き物の変化などを捉える。

③ 生活全体を見つめる

登園から降園までの生活の流れ、昨日から今日への保育の流れを踏まえて考える。さらに、社会的事象や家庭・地域社会で体験したことの中で、園生活に取り入れたいことを捉える。

幼児の発達の過程を理解して、幼児の実態を把握し、幼稚園一年間の子ども達の育ちを見通したねらい、環境構成、教師の援助と配慮、グループ活動を取り入れた具体的な年間指導計画を作成した。

次ページ参照

幼児理解を図るためには、教師が温かな関心をもって幼児の姿を見ながら、共に生活することが大切である。また、幼児理解を深めるためには日々の記録を常に心がけておくことが大切

「伝え合い」を育むための年間指導計画

		I 期（4月～5月）	II 期（6月～7月）
発達 の過程		教師との触れ合いや友達と遊ぶ中で、園生活に親しみ安定していく時期。	園生活の中で安定し、気の合う友達とかかわりながら遊びを広げていく時期。
ねらい		・新しい生活に慣れ、友達との遊びや生活を楽しむ。 ・教師や友達の話などをよく聞き、自分の考えを伝え、遊ぶ楽しさを味わう。	・友達と一緒に遊びや生活を進める楽しさを味わう。 ・友達とのつながりを深め、互いの思いを伝え合いながら遊びを進める。
コミュニケーション能力の育ちの過程	聞く	・教師の話喜んで聞く。 ・絵本や紙芝居を喜んで聞く。 ・友達のつぶやきを聞く。 ・友達の言葉や話を聞いてわかる。	・教師の話に興味・関心をもって聞く。 ・言葉の繰り返しやリズムの楽しさを楽しむ。 ・簡単な遊びのルールを聞きわかる。 ・友達の話を聞き、受け止める。
	伝え合う	・友達とイメージを伝え合いながら遊ぶ。 ・自分から進んで教師や友達に挨拶をする。 ・友達の歌声を聞きながら一緒に歌う。	・友達と喜びや感動を共有し伝え合う。 ・グループで声を合わせて一体感を感じる。 ・遊びの中でトラブルになった時には教師を仲立ちとして互いの思いを伝える。
みんなでかかわる活動	グループ活動	・新しいグループの友達を知り、グループの名前をみんなで考えて決める。 ・パートナーを覚え、並び方を覚える。 ・簡単なゲームや手遊びをする。 ・当番活動の仕方がわかる。	・グループの名前をみんなで考えて決める。 ・ゲーム遊びをする。（仲間を意識したゲーム遊び） ・進んで当番活動に取り組もうとする。
	グループでの遊び	・並びっこゲーム ・背中合わせオニ ・あくしゅでこんにちは ・しっぽとり ・はないちもんめ	・仲間集めゲーム ・ケンケン競争 ・王様ジャンケン ・りすと木 ・ボール送りゲーム ・スラロームゲーム
	園全体	・入園式 ・親子交通安全教室 ・誕生会（毎月） ・アサガオ植え ・春の遠足 ・体育館活動（体育館での約束・リズム遊び）	・保護者による絵本の読み聞かせ ・良い菌の表彰式 ・体育館活動（フォークダンス・リズム遊び） ・夏野菜の栽培 ・園外保育
☆援助と配慮 ○環境構成		☆教師も一緒に遊んだり一人一人の遊びを見守ったりしながら、子どものつぶやきや要求を見逃さず対応し、遊びが発展するように援助する。 ☆皆と一緒に動く楽しさを味わえるようなリズムカルな集団遊びを取り入れる。 ○のびのびと安定した気持ちで生活ができるように活動の流れに沿って時間や場を設定し、ゆとりがもてるようにする。	☆集団行動やグループ遊びなどの機会を多くもち、その中で自分の力が十分に発揮できるような助言や援助をする。 ☆友達関係を深めるために、仲間に入ったり、アイディアを提供したりして、状況に応じた援助をする。 ☆教師に自分の気持ちを十分に受け止めてもらったり、仲立ちとなってもらったりする温かな雰囲気の中で、友達とのかかわりをもてるようにする。そうする中で相手の気持ちも感じ取れることができるように配慮する。 ○選択したり、力を試せる場を設定する。

		Ⅲ期（８月～１２月）	Ⅳ期（１月～３月）
発達 の過程		友達とイメージを伝え合い、力を合わせてやり遂げる楽しさがわかる時期。	友達同士で目的をもって園生活を展開し、自信をもって行動していく時期。
ねらい		- 遊びや生活の中で、共通の目的をもって、工夫しながら活動に取り組む。 - 自分たちで考えたことを遊びの中で実現したり表現したりする楽しさを味わう。	- 自分らしさを大切にしながら、協力して遊びや生活を進めていく充実感を味わう。 - 様々な活動に楽しんで取り組みながら、自分の思いや感じたことを豊かに表現し合い、互いの成長を喜び認め合う。
コミュニケーション能力の育ちの過程	聞く	- 最後まで話を聞き話の内容がわかる。 - 素話や物語を聞く。 - 遊びのルールを聞き理解する。 - 相手の気持ちや反応に気付きながら聞く。	- 大事なことを捉え興味をもって聞く。 - 長いストーリーの絵本や物語の内容を想像して聞く。 - 指示や目的を理解し自分から行動する。 - 友達のアドバイスや励ましを聞き入れる。
	伝え合う	- 困っている友達に気付き声をかける。 - 互いの考えを受け止めて調整する。 - 目的に向かって思いや考えを出し合う。 - 友達のよいところを褒めたり認めたりする。	- 思いを伝えきれていない友達に気付き意見を聞く。 - グループの友達と相談して意見をまとめる。 - 友達の思いや考え受け止めて自分の思いや考えを伝える。 - 身近な事柄について話題に沿って話し合う。
みんなで かかわる活動	グループ活動	- 新しいグループを自分たちで決める。 - 自分たちで当番活動を進めようとする。 - 朝・帰りの会でみんなを集める。 - ルールのある遊びをする。 - 楽器遊びをする。	- 自分たちで当番活動を進める。 朝、帰りの会でみんなを集めたり、進めたりする。 - 今日一日のめあてをグループで話し合う。 - 生活や遊びを進めるために話し合う。
	グループでの遊び	- 伝言ゲーム - 指キャッチ - おすもうゲーム - つながりチャンピオン - ジャンケンリレー	- かるた - ドッジボール - トランプ - サッカー - すごろく
	園全体	- 運動会 - 秋の遠足 - お楽しみ会 - 体育館活動（フォークダンス：パートナー交代） - ジャガイモの栽培・花の苗植え	- 生活発表会 - お別れ遠足 - カレーパーティー - 修了製作 - 一年生との交流
☆援助と配慮 ○環境構成		☆友達同士で遊びを伝え合ったり、教え合ったりしている姿を見守り、自分たちで遊びを進めていく楽しさを味わえるようにする。 ☆子どもの気持ちに寄り添い、場面や機会をとらえ、内容によっては周囲の仲間に伝えたり、学級で考えたりする。 ○自分たちで相談したり、活動を発展させたりすることができるように、時間と場所を十分にとる。	☆グループ同士が交流できるような環境を用意し、お互いが影響し合いながら、活動が展開できるように援助する。 ☆個々から出てきたイメージや膨らんだイメージをまとめて実現できるように援助し、自分たちで取り組んだという充実感が味わえるようにする。 ○グループやクラス全体で活動に取り組んだり、自分たちで遊びを計画したり、発展させたりする場を用意する。

3 保育実践

【具体仮説3】

友達と話し合って進めるグループ活動の中に、心を動かし伝えたいくなるような活動や援助の仕方を工夫することにより、言葉による伝え合いができるであろう。

(1) グループ活動の工夫

グループ活動の工夫と言葉の育ち

自分の思いを言葉で伝え合えるようになるには、友達と共通の目的に向けて話し合って進める活動を積み上げていくことが必要である。そこで、入園当初からの友達と話し合って進める活動にはどのようなものがあるか、言葉の視点から以下にまとめた。

[5～6人のグループで行う活動]

- (ア) 遊戯室の大型遊具(大型箱積み木、功技台、カラーボックスなど)を使い、弁当を食べる家を、グループで相談しながら作り、そこで昼食をとり、その後、しばらく遊んだ後、大型遊具を片付ける。

この活動でみんなで話し合いながら協力すると、よい家ができること、また、大型遊具の扱い方も学ぶ。

- (イ) カラーポリ袋を使い、うろこの形を話し合って、鯉のぼりを作る。

この活動で、グループで決まったことは自分の意に添わなくても、みんなで協力して取り組まなければならないことを学ぶ。また、そのことで、自分がみんなに受け入れてもらえることも学ぶ。

- (ウ) グループでぐー・ちょき・ぱーのどの拳を出すかを話し合って決め、相手グループとからだで表現するジャンケンをし、勝ち負けを競う活動をする。

この活動で話し合いというのは、自分の意見を言うだけではなく相手の意見も聞かなくてはいけない、決まったら自分の意に添わなくても我慢しなくてはいけないということを学ぶ。

- (エ) 鈴、カスタネット、タンブリン、トライアングルを使い、歌い慣れた歌を歌いながら、どこで、どの楽器を鳴らすか選び、どのように表現するかを話し合って合奏づくりをし、みんなができたなら発表し合う。

この活動で、実際に楽器の音色を聞きながら話し合うとよいことを学ぶとともに、他のグループのよさも学ぶ。

- (オ) グループで様々な役割を分担し、保育者の話すストーリーに沿って表現していく。

この活動で、グループの友達がそれぞれ自分が分担した役割を果たしているという、友達に対する信頼感を学ぶ。

このような体験を通して、幼児は友達との遊び方を知り、やがて、友達と共通な目的に向けて話し合いながら遊びを進める喜びを味わえるようになっていく。

(2) 幼児の実態に応じた援助の工夫

- ① 話し合って進めるグループ活動での配慮と援助

グループでの話し合いを進める上での配慮と援助を以下のようにまとめた。

ア 1回目のソシオメトリックテストで誰からも選ばれなかった子が、友達として選んだ子を同じグループにするなど、仲間関係を考慮したグループ構成にする。

イ 話し合う時の約束を決め、学級の皆で確認し合う。

【話し合う時の約束】

- ・みんなの顔が見えるように円になって話し合う
- ・思ったことを言葉で言ってみよう！
『こんなのは どう？』
- ・友達の考えも聞いてあげよう！
『それもいいねえ』

写真

② 伝え合いができるようになるための教師の援助

ア 子どもの話に心を傾ける

教師が心を傾けて幼児の話やその背後にある思いを聞き取り、友達同士で自由に話せる環境を構成したり、子ども同士の心の交流が図られるように工夫したりすることで、幼児の伝えたいという思いや相手の話を理解したいという気持ちを育てる。

イ 仲立ちをする

言葉が伝わらないときや分からないときに、状況に応じて教師が仲立ちをして言葉を付け加えたり、思いを尋ねたりすることで、話が伝わり合うようにする。

ウ 話し合いの場をグループで相談して決める。

ウ 話を集中して聞く機会をもつ

活動を始める前やその日の活動を振り返るような日常的な集まり、絵本や物語などのお話を聞く場面などを通して、皆で一緒に一つのまとまった話を集中して聞く機会をもつことで、聞くことの楽しさや一緒に聞くことで生まれる一体感を感じられるようにする。

エ 子どもと共に聞くことを楽しむ

子どもが集中して聞けるようになっていくために、話し手や話の内容に興味や関心をもつことができるよう、落ち着いた場を設定し、話の内容や伝え合うための工夫や援助を行い、教師も子どもと共に聞くことを楽しむ。

写真

Ⅶ 指導の実際

1 活動計画

回	月日	ねらい	活動内容 ◆グループ ・全体	教師の視点
1	11月20日 (金)	○新しいグループの名前を皆で考えたり、グループの友達に親しめるようにゲーム遊びを楽しむ。	◆グループの友達と「ならびっこゲーム」をする。 ◆新しいグループの名前を皆で考え、話し合う。 ◆何でこの名前になったのかを発表する。	グループの名前について、話し合うことで、グループの仲間を意識し合えるようにする。 ソシオメトリックによるグループ編成
2	11月24日 (火) 帰りの会	○感じたこと（楽しかったこと、困ったことなど）を自分なりに言葉で伝えることができる。	・円になって座り友達や教師の話を聞く。 ◆各グループの当番が今日一日を振り返り発表する。 ・話の中で皆での話し合いが必要な話題については、学級全体で話し合いをもつ。	みんなの顔が見えるように円になって座り、友達の考えや思いを聞き、いろいろな考えや思いがあることに気付かせていく。

3	11月26日 (木) 朝の会	○友達を大事にする気持ちがもてるようにする。 ○自分の思ったことを皆に伝え、友達の思いも聞くことができる。	・「ぴよぴよさん」の手遊びをする。 ・人形を演じながら「あいさつ」や「〇〇さん」と友達の名前に「さん」を付けることなどについて話し合いをする。 ・一人一人意見（気持ち）を発表する。	「あいさつ」や「〇〇さん」と友達を呼ぶことで、友達を大事にすることや、自分もそうされることで、心地よいことを気付かせていく。
4	11月30日 (月)	○歌をうたったり、ゲーム遊びをしながら教師や友達と一緒に楽しく過ごす。	◆グループでの様々なゲーム遊びをする。 「あくしゅでこんにちは」 「やきいもジャンケン」 「仲間づくり」 「ボール送り」	様々なグループでの遊びを通して、仲間意識が芽生えるようにしていく。 楽しい雰囲気でごせするようにしながら教師も一緒に参加する。
5	12月1日 (火)	○イメージや思いを伝え合いながら、お話づくりを楽しむ。	◆6種類のペープサート（ちょうちん、みつばち、ばった、家、ケーキ、花）を使ってお話を作る。 ◆お話ができたグループは発表する。	グループで話し合っただけでお話が出来たグループを紹介していくことで、協力していくことを伝えていく。
6	12月2日 (水)	○イメージしたことを伝え合いながら、ペープサートでの話作りを楽しむ。	・「いたずらあおむし」の指人形のお話を見る。 ・ペープサートを使い簡単な話を作って皆の前で発表する。 ◆前回、まだ発表していないグループはお話を発表する。	教師がお話を演じモデルになることで、お話づくりへの意欲につなげていくようにする。 子どもたちから出てきた話も拾いながらお話に盛り込んでいくようにする。
7	12月4日 (金)	○言葉遊びの面白さを知り、自分の考えたことを伝えることができる。	◆各グループで言葉遊び（しりとりに仲間集め）をし、用紙に言葉を書く。 ◆各グループごとに発表する。	友達の考えにも耳を傾けられるように配慮する。
8	12月7日 (月)	○友達と考えを出し合いながら、お話づくりに取り組むことができる。	◆6つのペープサート（アイスクリーム、風船、飛行機、ねこ、かめ、てんとう虫）から、グループの皆で相談して、お話づくりをする。 ◆各グループで出来たお話を発表する。	一人一人が発言できるように、話し合う時の約束を話し合い、自分の思いを出せない子へ配慮し、教師も話し合いに参加するなどして援助する。

9	12月8日 (火)	○友達と教え合い、協力しながらペープサート作りを進めていく。	◆今までの言葉遊びの中から多くでてきた言葉を教師が選択し、それぞれのグループで役割を決め、ペープサートを製作する。	教え合ったり、協力し合ったりする場面を捉え、認めていくようにする。
10	12月9日 (水)	○誕生会に向けて、グループの友達と一緒に協力し、伝え合いながらお話づくりに取り組むことができる。	◆お話の内容をグループで話し合う。 ◆自分の考えを伝えたり、友達の考えにも耳を傾ける。 ◆お話ができたグループは皆の前で発表する。	誕生会への期待を膨らませていくことで、グループでの話し合いが意欲的になり、言葉による伝え合いが活発にできるようにする。
11	12月14日 (月)	○友達と考えたり、工夫したりしながらペープサートのお話づくりに取り組むことができる。	・学級みんなで発表するお話について内容を考える。 ◆それぞれのペープサートのグループで集まり、セリフや演技方を話し合う。	話し合いの中で、「こんなのはどう?」「それもいいねえ」と、友達の考えを認め合う場面を捉え、他児の考えにも気付かせていく。
12	12月17日 (木)	○誕生会当日に期待し、友達と工夫しながら練習に取り組む。	◆グループで協力しながらお話を仕上げる。 ・舞台上で練習する。	誕生会への期待や、共通のイメージをもつことで、意欲的に活動に取り組めるようにする。
13	12月18日 (金)	○友達と一緒に表現する楽しさや「ペープサートでのお話づくり」をやり遂げた達成感を味わう。	・誕生会でこれまで友達と一緒に頑張ってきたことを見てもらう。 ◆グループで役になりきって、セリフを言ったりペープサートを演じたりする。	これまでの取り組みを認め、自信をもって発表できるようにする。 友達とやり遂げた満足感を味わえるようにする。

写真

写真

2 活動の概要

(1) 「グループで話し合って、いろいろな活動に取り組んでみよう！」

教師の思い

- 幼稚園生活の中で、心動かす体験をし、友達や教師にその気持ちを伝え共有し合う喜びを味わってほしい。
- グループの友達とかかわる中で、思いや考えが伝わる喜びを感じてほしい。
- 様々な遊びや、お話づくりを通して自分の話や思いが相手に伝わり、また、相手の話や思いが分かる楽しさや喜びを感じ、伝え合うことができるようになってほしい。
- 自分の気付きや考えから新たなやり取りが生まれ活動が共有されていく満足感を味わってほしい。

【第1時】 新しいグループの友達に親しみがもてるようにする グループの名前をみんなで考え話し合う

幼児の姿	教師の援助
K子：「ねえ、ももグループっていいんじゃない！ももグループでいい？」 S男：「パイナップルグループもいいんじゃない？」 K男：「ジャンケンで決めた方がいいよ」 ジャンケンでももグループに決まるが、他のグループも、ももグループにしたいという話を聞いて、また、相談し合う。 教師：「みんなで仲良く話し合いしているからえらいね！」 K男：「わかった！このグループは仲良しだから、なかよしグループにしよう」 グループのみんな：「いいねえ、そうしよう！」 一人の女の子が泣きだしたグループ S子：「りんごグループにしようよ」 N子：「なんで、S子が決めるわけ？」 S子：「だって、大きい人はみんなりんごがいいって言っているよ」 N子：「このグループには大きい人だけじゃないさ」 S子：「だって・・・」と、S子が泣きだした D男：「じゃ、りんごにする？」 教師：納得がいけない様子のN子を配慮して「N子も考えた名前があるんだよね。D男だってそうだよね。S子と同じくらい泣きたい気持ちなんだよね。だから、もう少しみんなで考えてから決めた方がいいと思うよ」 N子：「S子泣かないで、みんなでもう1回考えよう」	『一人一人が自分の考えたことを言うこと、皆で相談して決めることなど』を確認し合い、話し合いを始めさせる。 話し合いがスムーズにいかずに困っているグループには、皆で相談しているというグループの良さを認めてあげ、励ましていく。 自分の思いが強すぎて互いに、自分の意見を通そうとする子に対し、状況に応じて、仲立ちをして子どもの思いを受け止め、言葉を加えたり、思いを尋ねたりすることで、話が伝わり合うようにする。

【第2～3時】

朝や帰りの会などの集会時での伝え合いの工夫をする

幼児の姿	教師の援助
1 教師の演じる人形劇を見る。 2 「あいさつ」について自分の思ったことを一人一人話す。 3 学級のみinnであいさつについて話し合う。	あいさつについて皆で考えていくことにより、あいさつを交わす心地よさや大切さを学べるようにする。

教師の思い

○幼稚園生活の中で日常的に交わされるあいさつには、

- ★出会いを喜び合う朝のあいさつ
 - ★別れを惜しみ、再会を楽しみにする気持ちを伝え合う帰りのあいさつ
 - ★名前を呼ばれたときにする返事
 - ★相手に感謝の気持ちやお礼を伝える言葉
 - ★相手のことを心配したり、元気になったことを喜んだりする言葉
- などがあるが、このようなあいさつを交わすことによって、互いに親しさが増し、あいさつを交わす心地よさを味わってほしい。

☆朝や帰りの会で、自分の考えを伝えたり、みんなで話し合ったりする場を設けることにした。その際、皆の表情がよく見えるように円になって座れるようにし、一人一人の言葉をじっくり聞けるように、十分な時間を確保したことで、学級全員が自分の気持ちを伝えることができた。また、友達の話にも耳を傾けることができた。

「なぜ、あいさつをしないといけないの？」について話し合い、子ども達から様々な意見が出てきた。

- ・あいさつをしたら気持ちよくなるから
- ・あいさつをしないと嫌な気持ちになるから
- ・あいさつをしないといけないから
- ・あいさつをしないと友達が一人もいなくなってしまうから
- ・あいさつをすると、友達と気持ちよく遊べるから
- ・あいさつしないでいたら、何だか朝からすっきりしないから

写真

写真

【第4時】

様々なグループでのゲーム遊びを楽しむ

教師の思い

○いろいろなゲーム遊びを通して、友達と進んでかわり、自分の思いを伝えらるようになったり、楽しさを共有したりできるようになってほしい。

『あくしゅでこんにちは』

この遊びは、曲の間奏で次のパートナーになる友達を探さないといけない。進んで友達に気持ちを表現することが苦手なR男は「一緒にやろう」という言葉がなかなか伝えられずにいた。

教師：R男のパートナーになり遊びを楽しんだ後で、R男が友達になりたいと思っているI男のもとへ連れて行き「一緒にやろうって言ってごらん」と声をかけるよう促した。

R男：「一緒にやろう」

I男：「うん、いいよ！」

『ボール送りゲーム』

『やきいもジャンケン』『仲間づくり』など様々なゲーム遊びを楽しんだ子ども達は、ボール送りゲームでは各グループでの競い合いになった。

S男：「みんな、ちゃんと前見とけよお」「しっかりボール渡せよ」「くっついたほうがはやくなるよ」

K男：「絶対、がんばろうなあ」

教師も一緒にゲームに加わりながら、みんなで楽しむ雰囲気を作っていく。

一人ぼっちになっているR男を誘い、また、次の友達へとつないでいく。

R男が自分から「一緒にやろう」と言えたのを捉えて、みんなに伝えていくことで、R男に自信をもたせ、遊びの楽しさを伝えていく。

以前に経験したことのあるボール送りゲームを取り入れることにより、意欲を高めさせ、グループのみんなで協力して、工夫していけるようにする。

写真

写真

子どもの変容

様々なグループ遊びを取り入れ楽しむ中で、友達に気持ちを伝えたり、楽しい思いを共有する姿が見られ、グループ意識も芽生えてきた。

「いっしょにやろう」

「おもしろいねえ」

「また、やろうねえ」

と、伝え合いができるようになってきた。

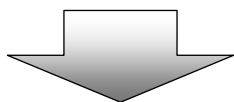
(2) 「グループのみんなでお話づくりをしてみよう」

【第5～6時】

教師の思い

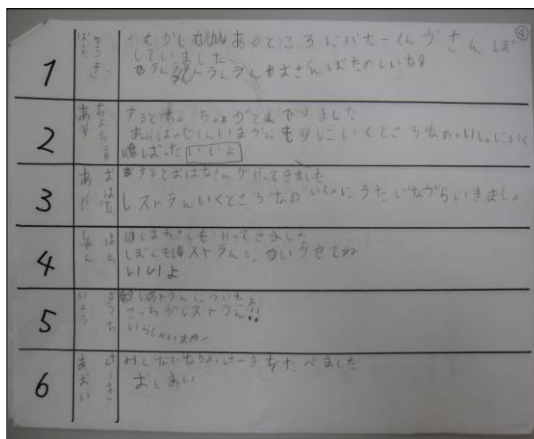
○今回は、登場する6つのペープサートを教師が準備し、各グループで誰がどの役をするかも相談し、話し合って決めるようにすることで、グループでの伝え合いが活発になってほしい。

幼児の姿	教師の援助
さくらんぼグループでは、S男とA子がグループの中心になってお話づくりを引っ張っていた。けれども、A子は書くのをやりたがり、鉛筆を持ちたいというM子の言葉を聞き入れなかった。S男は話を勝手に進めようとしていた。 教師：「グループの友達でちゃんと話し合って決めて下さいね」という教師の言葉を聞いて、A子は書くのをM子と交代してやるようになった。 S男：「R男はペープサートなにがいい？」と、グループのみんなに意見を聞くようになり、話を進められるようになっていった。 教師：「さくらんぼグループさんは、みんなで協力して話を考え、台詞も書いてあるのでとても面白いお話になっていますよ。みんなにも見てもらいましょうね。」	お話づくりで話し合った内容をグループごとに用紙に書いてもらうことにより、グループ全員に話の流れが分かりやすいようにした。 友達の思いにも耳を傾けていきながら、お話づくりに取り組めるような言葉かけをしていく。 グループで工夫しているところを取り上げて、皆に伝えていくことで、他のグループにも刺激となるようにする。



	ペープサート	さくらんぼグループのお話
1	バッタ	むかし、むかしあるところにバッタさんが散歩をしていました。 「ランラ ランラ ラン お散歩楽しいな！」
2	ちょうちょ	すると、ちょうちょが飛んできました。 「あーらバッタ君、今から森に行くところなの。一緒に行く？」 バッタ：「いいよ」
3	お花	すると、お花さんがやってきました。 「レストランに行くところなの、一緒に歌いながら行きましょ」
4	はち	はちさんもやってきました。 「ぼくも、レストランに行かせてね」「いいよ」
5	おうち	「レストランに着いたよ」「こっちがレストラン!!」 お家：「いらっしやいませ〜」
6	ケーキ	みんなで仲良くケーキを食べました。 おしまい。

写真



【第7時】

グループで言葉遊びをやってみよう

教師の思い

○各グループで言葉遊び（しりとり、仲間集め）に取り組む中で、友達同士で様々な刺激を受けながら、いろいろな言葉に触れたり、友達との伝え合いを楽しんでほしい。

言葉遊び

子どもの姿

言葉の仲間集めでは、教師からの出題「甘いもの」「しっぽがあるもの」「飛ぶもの」などに、自分の中でイメージしたものを身振りも交えながら、友達に伝えようとする姿が見られるようになった。

写真

教師の援助

☆言葉遊びで出てきた言葉を書きださせることで、同じ言葉が繰り返されないようにする。
☆グループの友達みんなの言葉に耳を傾けられるようにする。

各グループの発表コーナー

子どもの姿

いつもは発表となると声が小さくなりがちな子も、グループ全員ということで元気よく発表していた。また、質問コーナーで誰を当てるか相談したりと、様々な場面で言葉による伝え合いの姿が見られた。

写真

教師の援助

☆全員に発表する機会を与えることで、自信をもたせていく。
☆質問コーナーで友達からの疑問に、グループのみんなで相談して答えられるようにする。

【第8時】

教師の思い

○第7時の言葉遊びで、子ども達の中からよく出てきた言葉を拾い集め、お話づくりでイメージが膨らましやすく6つの言葉をペープサートの材料として取り上げた。また、お話づくりの仕方について伝えていくことで、明日からの活動に期待をもち、意欲的に取り組めるようになってほしい。

言葉遊びから拾った言葉でお話づくりをする

てんとう虫

かめ

ねこ

ふうせん

ひこうき

アイスクリーム

お話づくりの仕方

○どのグループも上記の6つのペープサートを取り入れてお話づくりをしていく。

- ① グループで誰が何のペープサートをしたいかを話し合いで決める。
- ② それぞれが担当するペープサートを作る。
- ③ ペープサートを動かしながらグループみんなで、どんな話にしていくかを相談する。
- ④ 一人一人が話すところや、グループみんなで声を揃えるところなどを練習する。
- ⑤ 学級のみんなの前で、グループ全員で力を合わせて発表する。

【第9時】

ペープサートを製作し、お話をつくってみよう

教師の思い

○グループの友達と思いや考えを伝え合い、楽しみながら活動に取り組んでほしい。

ペープサートの製作

子どもの姿

ペープサート作りでは、各グループ同じ言葉からイメージして作っていくが、子どもの個性により様々な色や形のペープサートが出来上がった。友達と協力しながら作っている子の姿も見られた。

写真

教師の援助

☆画用紙いっぱい描くことを伝えたり、なかなか描けない子には絵本などを見せてイメージを広げてあげたりと、自ら楽しみながら作っているようにする。

お話づくりをしてみよう

子どもの姿

グループで好きな場所を選び、そこでお話づくりをする中で、自然と聞こえてくる他のグループの話もヒントにしながら話をつくっている。子ども達自らが楽しんでいる様子がうかがえる。

写真

教師の援助

☆言葉での伝え合いがもっと活発になるよう、実際にペープサートを動かしながらお話づくりに取り組めるようにしていく。
☆発言の少ない子の思いを引き出し他児に伝えられるように援助する。

グループ活動の中で変容した子どもの姿

R男・・・自分の考えを言おうとするが、聞き入れてもらえないときには、話し合いから抜けてしまう。

R男の話や考えに教師が心を傾け聞くことにより、R男は益々目を輝かせ、思いを自分なりの言葉で伝えるようになり、グループの友達にも自信をもって自分の考えやアイディアを伝えられるようになっていった。

Y男・・・頑張ってやりたい気持ちはあるが、友達とのB男と一緒にいると、ついついつられて遊んでしまう。

活動の後でY男とじっくり話し合い、Y男のお話づくりの気持ちを聞いていった。Y男はこんな話にしたいという考えをしっかりと持っていたので、そこをくみ取り、グループのみんなに伝えていく橋渡しをしたことで、話し合いに意欲的に参加するようになっていった。同じように、B男にも対応していったところ、B男もしっかりと活動ができるようになっていった。

M子・・・グループをリードしたが、話はいつもM子中心で、あまり友達の考えに耳をかさない。

M子がお話づくりの中で、I男の考えに「いいねえ」と言って取り入れてくれたことを褒め、認めていったことがきっかけとなり、次第に友達の言葉や気持ちにも耳を傾けられるようになっていった。

3 公開検証保育

公開検証保育指導案

平成21年12月9日(水)

沖縄市立高原幼稚園 3組

男児17名 女児16名 計33名

保育者 宮城小百合(T1)

渡嘉敷彩子(特別支援学級:T2)

(1) 活動名 「お話づくりをしよう」

(2) 活動設定の理由

お話づくりは、豊かな想像力や言葉を育んでいく。何をしたいか、どんなストーリーにするか、様々な役割分担など、相談して考えて表現するまで、子ども達の力で進めていくことができる。

今回は、幼児自身が自分で作れるペープサートを取り入れることにした。これまで、しりとり遊びや、言葉の仲間集め遊びなどで、友達からの刺激を受けたくさんの言葉に触れ、ひらめいた言葉を声に出して言えるようにしてきた。そして、子ども達の中から出てきた言葉を、登場人物や場に設定することで、子ども達がよりイメージを広げていきやすいようにした。ペープサートを子ども達が自分で製作して取り組んでいく過程で、グループ活動を取り入れ、グループの友達と言葉で伝え合いながら目的に向かって活動することにより、子ども達同士で意見を出し合い、友達の考えや気持ちも受け止めることができ、一緒に一つの活動を成し遂げた達成感を味わうことができるであろうと考える。

(3) 幼児観

運動会などの様々な活動を経験して、学級の皆で一つの目標に向かって取り組み、成し遂げてきたことが自信となり、さらに、いろいろな活動に挑戦していこうとする意欲へとつながっている。消極的で以前までは人前で発表することが苦手だった子が、朝の会や帰りの会の始めに子ども達自ら前に出て、言葉での表現遊びを友達と交代しながらやっていく姿も見られ、意欲的に参加するようになった。しかし、まだ自分の思いを相手にうまく伝えられない子や、自分の思いばかりを主張しようとする子の姿も見られるなど友達とのコミュニケーションがうまく取れない子もいる。

そこで、自分を受け入れ聞いてくれる教師や友達などの存在を感じ、安心感や安定感を基盤に、自分の考えを伝えたり、相手の考えも受け入れたりする経験を重ねていくことが必要であると考え。

(4) 指導観

誕生会に向けたペープサートでのお話づくりでは、自分たちの言葉遊びの中から出てきたもので、さらにイメージを膨らませて感じたことや考えたことを言葉に出して伝えられるようになってほしい。そうした中に、グループでの活動を取り入れることにより、グループの友達と協力したり、相談したり、励まし合ったりするなどの、言葉による伝え合いが育まれていくようにしたい。

お話をつくる上で、ペープサートの絵にする題材については、子ども達がイメージしやすく描きたくなるようなものを教師が選択する。グループでお話をつくっていく過程で、グループでの活動は、一人一人が自分の考えを主張したままでは進んでいかない。また、だれかの指示を皆が待っていても進まない。友達同士での伝え合う力がないと一つの話としてまとまらなくなっていくので、子ども達一人一人の意見を出させながら、教師は受け止めたり、励ましたり、橋渡しをしたりトラブルの解決を手伝ったりして話し合いができるように支えていく。成し遂げたことで子ども達一人一人が充実感や達成感を味わい自尊感情と他者理解が培われていく。友達との気持ちの伝え合いにより、伝わる喜びと、自分の気付きや考えから新たなやり取りが生まれ活動が共有されていく満足感を味わわせたい。また、特別支援学級とも連携して活動を進めていく。

指導案			平成 21 年 12 月 9 日（水）	
幼児の姿	ペープサートでつくったお話づくりを誕生会で発表することを楽しみにしている。それぞれのグループで話し合ってお話づくりができるようになってきているが、一方的に話を進めてしまいがちな子や、自分の考えを伝えるまでに時間のかかる子など、グループにおいて差が見られる。			
ねらい	誕生会に向けて、グループの友達と一緒に協力し、伝え合いながらお話づくりに取り組むことができる。	内容	・お話の内容をグループで話し合う。 ・自分の考えを伝えたり、友達の考えにも耳を傾ける。	
活動仮説	お話のイメージが膨らむようなペープサートを提示することで、グループでの話し合いが意欲的になり、言葉による伝え合いが活発になるであろう。			
時間	○予想される幼児の活動	☆教師の援助	◎環境構成	
10：00	○今日の活動を確認する ・お話づくり ○グループで話し合う際の約束を確認する 話し合う時の約束 ・思ったことを言葉で言ってみよう ・友達の考えも聞いてあげよう ・みんなで相談して決める	☆12 月の誕生会が来週であることを伝え、「みんなで楽しい誕生会にしていこうね」と話をすることで期待をもちながら活動に取り組めるようにする。 ☆昨日の活動を振り返ることで今日の活動の見通しをもたせる。 ◎「話し合う時の約束」を確認する際に、絵や文字なども一緒に表示することで、視覚からも伝わりやすいようにする。 ☆一人一人の考えを言えるように、自分が担当する役の内容については、自分で考えて言うことができるようにする。 ◎お話のイメージが膨らむように、各グループから予め上げてもらい、自分達で製作したり、教師が準備したりしたペープサートを各グループに配る。 ☆友達同士で伝え合ったり、相談し合ったりしている姿を見守り、自分達で遊びを進めていく楽しさを味わえるようにする。		
10：10	○グループに分かれてお話づくりをする	☆友達の考えに耳を傾けたり、受け止めたりしている子の姿を認め、「すてきなお友達を見つけたよ」と紹介し、グループ全員が参加して伝え合いができるように言葉かけをする。 ☆活動の途中で、ユニークな語り方やペープサートの動かし方などで工夫が見られるグループを紹介するなどして、話し合いが活発になるようにする。		
10：35	○今日の活動を振り返る	☆活動終了の時間を事前に知らせておくことで、時間を意識して皆で協力し合えるようにする。 ☆今日の活動を振り返りながら、仕上がったグループに発表してもらったり、各グループの良さを認めていくことで、活動への意欲や満足感を味わわせる。 ☆お話がまだ出来上がらなかったグループには、「明日もあるから大丈夫よ。今日またお家でもどんな話にしようか考えてきてね」と言葉かけをする。		
10：45				
評価	・グループでの話し合いで、自分の考えを伝えることができたか。 ・友達の考えにも耳を傾けることができたか。			

公開検証保育の様子

① 今日の活動や、グループで話し合う際の約束を確認する

写真	写真	写真
○話し合うときの約束を確認する。 ○伝え合いができていたグループを紹介する。	○絵や言葉で伝え合いの仕方をしらせていく。	○誕生会までの見通しをもたせる。 ○話し合いの時間を予め決めておく。

② グループでお話づくりをする

写真	写真	写真
○子どもの話に心を傾けることによりその背後にある思いを聞き取る。	○状況に応じて教師が仲立ちをして話が伝わり合うようにする。	○好きな場所でみんなの顔を見ながら話し合いをする。

③ ペープサートで演技方を練習する

写真	写真
○グループのみんなで考えや思いを伝え合いながら、演技方を工夫していく。	○実際に他のグループやお客さんに見せながら、練習しているグループの姿も見られる。

④ 出来上がったお話を発表する

写真

○みんなの前での発表は「どきどきする」と緊張していた、いちごグループの子どもたち。

写真

○落ち着いて聞ける場を設定し、教師も子どもと共にお話を聞くことを楽しむ。

⑤ 今日の活動を振り返り、伝え合いの場とする

写真

○話を集中して聞く機会をもつことで、聞く楽しさや、学級の皆との一体感を感じられるようにする。

写真

○振り返りの話し合いの中で、今日の頑張りなどを発表し、伝え合いの場とする。

4 公開検証保育の考察

活動仮説

お話のイメージが膨らむようなペープサートを提示することで、グループでの話し合いが意欲的になり、言葉による伝え合いが活発になるであろう。

(1) 検証保育の経過

- ・ペープサートを新たに増やし、また、それを家で作ってきたり、「話も考えてきてね」と前日に言ったことで、「こんな話考えてきたよ」などと意欲的に活動に参加することがで

きた。

- ・話し合う場所もグループで好きな場所を選んで決めさせたことで、落ち着いた場所で円になって座り、友達の顔を見ながら話し合うことができた。
- ・話し合いの前に「話し合う時の約束」を確認し合ったことで、「こんなのはどう？」と自分の思ったことや考えたことを友達に伝えることができ、また友達の考えも聞き入れる子の姿も見られた。
- ・グループによって、お話がスムーズに決まったグループと、話がまとまるまでに時間がかかるグループがあったが、ほとんどのグルー

プで活発な話し合いが行われた。

- ・ペープサートの演じ方についても自分の考えを伝えている子も見られた。
- ・ペープサートを自分で作ったことにより、イメージがより広がり「運動会の話にしたい」など自分を主張できるようにもなっていった。
- ・お話づくりの中で、いすを一行に並べてペープサートを演じる舞台を作り、教師やお客さんに見せながら演じることで話がひとつにまとまっていき、最後まで仕上がる様子が見られた。

(2) 授業研究会から

- ・いつも一方的に進めがちであった子が、一人の子の意見を拾ったことを、導入で認め皆に知らせていったことで、その子は友達の話聞き入れる喜びを味わったように思う。また、そのことが他の子へも刺激になっていったのではないかな。
- ・互いの意見を認め合っていくことを、「それもいいね」と絵や文字で表現したことは子ども達にとって分かりやすかった。これからも、子どもたちを受け止め認めていき、よさを引き出してほしい。
- ・活動直後にペープサートを忘れたM君への援助があったからこそ、そのグループは話し合いもスムーズにいき発表までできたのではないかな。
- ・最後の振り返りの場面で、H君がグループの皆からお話がつかれなかったことを責められた時「H君は本当はお話づくりを楽しみにしていたんだよね、先生はわかっていますよ」と、H君を励ました教師の援助はよかった。
- ・お話づくりで行き詰まったグループに適切な対応ができるように、教師は全体に目を配りながら、支援の先生とともにT.Tを組んでいく必要がある。
- ・今回は友達を中心としたグループ構成であったが、他のグループ構成を取り入れてもいいのではないかな。

(3) 考察

本時の活動において、自分なりに思いを伝えたり、友達の話にも耳を傾けたりなどを学級全

体で確認し合って進めていった。また、言葉遊びからイメージした言葉でペープサートを作ったことで、よりイメージが膨らみ、グループの友達とお話づくりで伝え合いながら進めていく姿が見られた。このことから、イメージが膨らむようなペープサートを提示することは、グループでの話し合いが意欲的になり、言葉による伝え合いが活発になる手立てとして有効であったと考える。

しかし、伝え合いは活発であったが、お話の仕上げの段階で、話がまとまらなかったグループもあったので、今後はグループ間で話をまとめていく際の手立てを工夫していきたい。

VIII 研究の結果と考察

本研究テーマを「言葉による伝え合いができるための援助の工夫 ～友達と話し合って進めるグループ活動を通して～」と設定し、基本仮説を「言葉で伝える活動を工夫することにより、自分の思いや考えを伝え合うことができるであろう」とし、研究を進めてきた。

さらに基本仮説を、研究内容において、理論研究、指導計画、保育実践のそれぞれの具体仮説を立てて取り組んできた。そこで、その3つの具体仮説を検証することにより、本研究の結果と考察とする。

1 具体仮説1の検証

領域「言葉」の意義や幼稚園におけるグループ活動の意義について理論研究をすることにより、教師の援助のあり方が明確になるであろう。

幼稚園教育要領の領域「言葉」や「伝え合い」の意義について捉えていくことで、幼稚園における「伝え合い」のための教師の援助のあり方として、教師と子ども、子ども同士の間に聞いてみたいと思う関係性を築き、話の内容や聞く場の環境構成を工夫していくことの大切さがわかった。

その研究をもとに、年間指導計画に援助と配慮について具体的に示すことができた。

その結果、言葉とコミュニケーションとの関係では、子どもの声や思いに心を傾け、丁寧に言葉を受け止めていくことで、子どもの自分なりの表現を引き出していくことができた。

また、グループ活動を取り入れることで友達同士のかかわりがもてるようにし、仲間同士で考えや感じたことを伝え合ったり、協力し合ったりする経験を重ねていくことができた。

お話づくりでは、教材としてペープサートを取り入れることによって非言語的な環境を意図的に作り出しコミュニケーションが図れるようにしていった。

活動の概要(3)で紹介したR男は、友達と遊びたいのに言葉が足りなかったり、分かってもらえないときには叩いてしまったりと、そうする中で次第に友達との関わりも少なくなり、グループ活動においても消極的であった。

そこで、R男の気持ちを受け止め自信をもって友達とかかわれるように、様々な活動の中に伝え合いという両者の関係性が育まれるよう配慮していった。そうすることで、安定感や安心感を基盤に、友達と思いや感情をやり取りする中で、一方通行ではなく、互いの気持ちを伝え合うこと、表現していくことができるようになっていった。

2 具体仮説2の検証

言葉に関する実態調査や分析をし、年間指導計画を作成することにより、見通しをもった活動の展開・援助の工夫をすることができるであろう。

幼児の家庭でのコミュニケーションの様子や言葉による伝え合いの実態を捉えるために保護者へのアンケート調査を行った。アンケート結果から幼稚園で経験したことを家庭で伝えている幼児の実態を読み取ることができた。読み取った内容を踏まえ、言葉による伝え合いができるようになるために、幼稚園生活の中で心動かす体験を通して、幼児が言葉で伝えたいような経験を重ね、その経験したことや考えたこ

とを自分なりに話すことや、相手の言葉を聞くという態度を育てることが大切だと認識することができた。

また、年間指導計画を作成することで、言葉の響きを楽しむ「言葉遊び」から自分たちでお話を考えていく「お話づくり（ペープサート）」へと活動を展開することができ、グループでの活動を通して友達とのかかわりも広がり、学級全体で誕生会に向けての「お話づくりをしよう」という新たな活動を生みだすことができたものとする。

3 具体仮説3の検証

友達と話し合って進めるグループ活動の中に、心を動かし伝えたいような活動や援助の仕方を工夫することにより、言葉による伝え合いができるであろう。

自分の考えたことを話す中で、相互に伝え合う喜びを味わうことができるように、「お話づくりをしてみよう」という活動を設定し、友達同士かかわりながら、活動に取り組んだ。また、グループで相談したり、話し合ったりする活動を設けることで、グループ内でイメージやストーリーを共有し、かかわり合って活動に取り組めるようにしていった。

はじめは、グループの仲間同士でのかかわりを意識しながら、まず声を出すことに抵抗をなくす活動を取り入れていくことで、言葉で表現する力が育てられるように取り組んでいった。様々なグループ構成で行ったゲーム遊びでは、「あくしゅでこんにちは」の歌を歌いながら相手を探していくことで、曲の流れの中で自然に言葉を交わし楽しみながら友達とかかわることができた。また、「言葉遊び」や「手遊び」などの唱え遊びでは、グループでの練習を重ね、できるようになると、みんなの前で声をそろえて発表するという一方で、グループの一体感として言葉が友達同士をつなぐものとなっていった。声を出すことにより心の緊張感が解かれ、言葉の面白さを体験し、みんなに伝えるという楽しさも味わった。

心を動かし伝えたいくなるような活動として、お話づくりでは言葉遊びから出てきた言葉をペープサートに取り入れることにより、子ども達がお話をつくるときや、ペープサートの絵を描くときにイメージしやすいようにした。

また、活動に入る前に集会などで、話し合うときの約束を子ども達とともに確認し合いながら、友達との言葉の伝え合いの中でのやり取りを絵や文字に表すなどわかりやすく提示していた。

そうすることで、どんなストーリーにするか、いつ、どのタイミングで登場させるか、台詞を考え、練習して発表するまでを、グループのみんなで考えを出し合い進めていくことを経験していった。

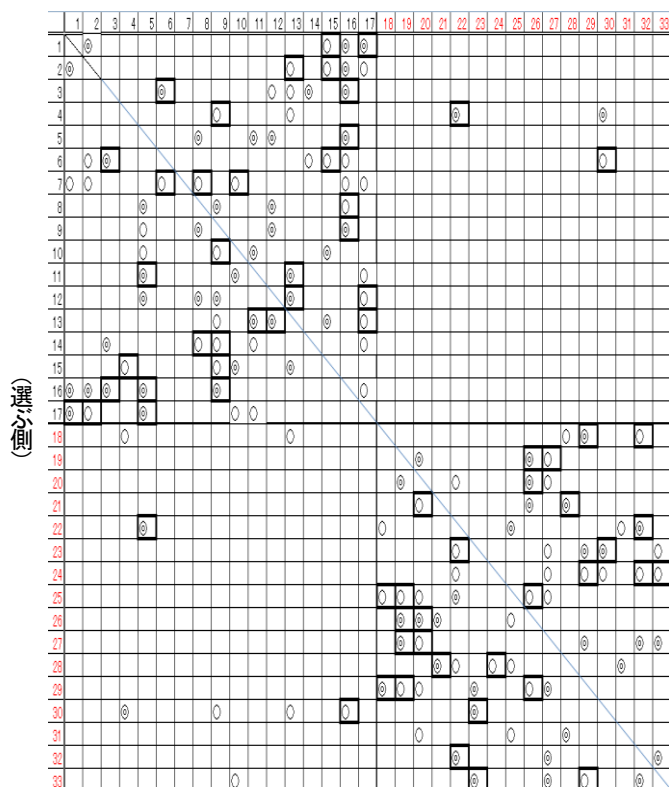
練り合いの段階では、友達同士での伝え合う力がないと一つの話としてまとまらなくなるので、幼児一人一人の意見を出させながら、必要に応じて教師は受け止めたり、励ましたり、橋渡しをしたり、トラブルの解決を手伝ったりしながら、グループでの伝え合いを支えていった。こうした経験を通して、これまで一方的な主張が多かった子が、「〇〇の考えもいいんじゃない」「どんなお話にしていこうか」と友達の考えに耳を傾けたり、友達の意見も取り入れたりしながら話し合えるようになってきた。

また、友達とのかかわりが上手く出来ず、グループ活動でも、やりたいことはあっても最後まで言えずに諦めてしまう傾向にあった子が、お話づくりを通して、自分が提案したことを友達が聞いてくれて共感してもらえた経験や言葉で伝えるという経験をいくつも積み上げていく中で、自信を付け相手に伝える言葉を使いこなせるようになり、心を開いて自分の気持ちを話せるようになっていった。

検証保育前後に行ったソシオメトリックテストにおける学級全体の仲間関係の変化を以下に示した(表2)。太枠(□)で囲ったものは検証保育後の新しい仲間関係である。

表2 (12月22日実施 ◎相互関係 ○選択関係)

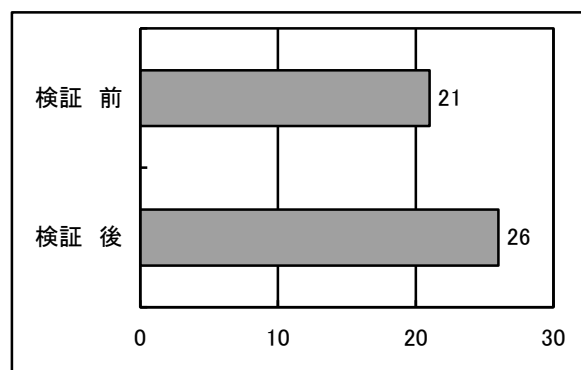
(選ばれる側)



検証保育後のテストでは、全員が好きな友達を3名あげることができ、検証前に比べ新しい友達の広がりが見られた。

次に、表3は、ソシオメトリックテストにおける相互関係の増減の変化を表したものである。

表3：ソシオメトリックテストにおける相互関係の増減



この結果から、相互関係の数が検証前の21から検証後では26に増えていた。その理由として、友達と話し合って進めるグループ活動を、様々

な場面や段階的に取り入れていったことが、結果として学級全体のつながりを深めていくことにつながったのではないかと考える。

以上のことから、本研究で目指す幼児像の自分の思いや考えを伝え合うことができ、友達と進んでかかわり、楽しんで活動に取り組むことができたと考ええる。

IX 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- ・幼稚園教育要領「言葉」について捉えなおし理論研究をすることで、様々な視点から幼児理解に努めることができた。
- ・保護者へのアンケート調査を行ったことで、幼児の言葉の実態を把握し、また幼児の言葉の発達に応じた活動を展開することができた。
- ・ソシオメトリックテストを活用することで、幼児間の仲間関係を把握することができ、グループづくりやグループ活動の展開の際に援助として役立てられた。

- ・年間指導計画を作成することで、発達の過程に応じた活動が明確になり、子どもの実態に応じながら見通しをもった活動の展開・援助の工夫をすることができた。
- ・心を動かし伝えたいくなるようなグループ活動を工夫し、自分なりに話すことや、自分の話も聞いてもらう経験をすることで、自分の気持ちを表現することができ、言葉による伝え合う喜びを味わうことができた。

2 今後の課題

- ・年間指導計画の実践及び活動内容や援助のあり方の再検討
- ・発達の過程を考慮したグループ構成と援助の工夫
- ・活動を通した子どもの変容の見とり
- ・伝え合いの活動が活発になるような場づくりと教材の工夫

〈主な参考文献・引用文献〉

- ・文部科学省 2008 『幼稚園教育要領解説』
- ・無藤隆・柴崎正行 2009 『新幼稚園教育要領・新保育所保育指針のすべて』 ミネルヴァ書房
- ・西久保 祐造 2008 『幼稚園の教育課程と指導計画』 ぎょうせい
- ・神長美津子 2009 『3, 4, 5 歳児のクラス運営』 ひかりのくに
- ・森上史朗・柏女霊峰編 2006 『保育用語辞典』 ミネルヴァ書房
- ・全国国公立幼稚園長会 2009. 7 月 『幼稚園じほう』
- ・小田豊・神長美津子 2008 『幼稚園教育要領の解説』 ぎょうせい
- ・岸井勇雄・無藤隆・柴崎正行 2006 『保育内容・言葉』 同文書院
- ・無藤隆 2009 「新幼稚園教育要領ポイントと教育活動『幼稚園』」 東洋館出版社
- ・文部科学省 2009. 10 月 『初等教育資料』